

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	李 炳鎬
論文題目	百済仏教寺院の特性形成と周辺国家に及ぼした影響 —瓦当・塑像・伽藍配置を中心に—
<p>審査要旨</p> <p>本論文は文献史料を基礎に、瓦当・塑像・寺院の伽藍配置など近年の考古学の成果に基づき、百済寺院の形成過程や、それが新羅や日本に及ぼした影響について検討することによって百済寺院史を体系的に提示しようとするものである。その構成は2部6章と補論からなるが、各部・各章別の概要は以下の通りである。</p> <p>第1部は漢城期の仏教受容から百済滅亡期までの百済寺院の展開過程を検討し、百済的な仏教寺院の特性が形成される過程を論じる。第1章では、漢城期と熊津期における仏教の受容過程と仏教関連遺物を検討し初期寺院の様相が述べられる。漢城期の仏教受容と関連した文献資料と仏教関連遺物の検討から、漢城時代の仏教伝来説を肯定できることを確認し、次いで瓦当の分析を通して熊津期寺院である大通寺が百済の本格的な伽藍を備えたものであって、その瓦当が梁の影響を受けて成立し、泗泚遷都(538年)以後、最も重要な范型となることを明らかにした上で、大通寺式瓦当の成立には百済における官営造瓦工場の成立過程と関連していることを論じる。</p> <p>第2章では、泗泚都城の中央に建立された定林寺址の出土遺物と伽藍配置の特徴を分析し、百済式寺院の成立過程と泗泚都城における定林寺址の位相を考究する。まず定林寺址出土塑像の製作技法と製作時期、奉安場所、系統などについて、共伴遺物と文献記事を、中国・日本の事例と比較しつつ、新たに発見された建物址の遺構配置状況について再検討して、百済式寺院の成立過程を明らかにする。次いで、泗泚都城内部で検出された道路遺跡の開設時期と出土木簡や文字瓦、地籍図に対する分析から、泗泚時代の王宮と定林寺の両者が有機的関係を有して意図的に配置された可能性を提示し、定林寺が都城内における中心的な寺院として泗泚遷都以後、新都のランドマークとなったことを指摘する。</p> <p>第3章では、泗泚時代の王陵群である扶余陵山里古墳群に隣接して建立された陵山里寺址の性格について論じる。陵山里寺址の中門址南側から発見された木簡について、その記載内容のみならず、出土状況も復元して木簡の使用および廃棄時期を把握し、これらが寺院の造営や運営と密接な関連を持っていることを明らかにする。次いで、伽藍中心部から出土した500点余りの瓦当の型式分類と相対編年、分布様相を分析して主要建物の建立順序を検討し、初期段階に講堂址を中心にした初期建物址群が木塔や金堂より先行して建立される特異な状況を推定する。このような伽藍中心部の変遷過程を、前に分析した陵山里木簡の記載内容と関連づけることによって、初期の建物址群が機能した段階と、木塔などが建立され寺院として機能した段階の性格が異なった可能性があり、中国と高句麗の事例を参考にして、その性格や機能が祭祀に関わることを指摘する。</p> <p>第4章では、泗泚遷都以後に展開した百済寺院の諸様相について、伽藍配置と塑像を中心に検討する。まず泗泚遷都以後、最初に建立された定林寺式伽藍配置が6世紀後半に軍守里寺址や王興寺址、7世紀前半に弥勒寺址が建立されるとともに如何なる変化をみせるのか、その様相や影響関係について検討し、次いで百済故地の寺院と窯址から出土した塑像を集成することで、その製作技法と奉安場所、技術系統を分析し、それが高句麗や新羅、日本から出土する塑像といかなる関連性を有しているのかを明らかにする。</p> <p>第2部は、百済の仏教寺院や技術が新羅と日本に及ぼした影響について論じる。第5章では、新羅最初の</p>	

寺院である興輪寺址出土瓦を中心に、そこに見られる百済系造瓦術について検討する。新羅では6世紀前半に百済系造瓦術の影響を受けて瓦を生産したことが以前から指摘されてきたが、改めて興輪寺址から出土した瓦当と平瓦(興輪寺式瓦当)に対する分析を通して、南朝-百済系、特に熊津期の百済瓦が直接的なモデルになることを具体的に裏づける。

第6章では、百済仏教寺院と造瓦術が飛鳥寺をはじめとする日本の初期寺院に及ぼした影響について考究する。まず6世紀代の百済では土器や建築など多方面にわたって高句麗系の文化要素が確認されただけでなく、王陵群である陵山里古墳群には高句麗系の古墳壁画が残っていることを指摘し、高句麗文化が日本に直接に伝わったのではなく、百済を経由して伝播した可能性を示唆している文化様相を明らかにした上で、飛鳥寺三金堂の高句麗起源説を否定し、百済起源説を提示する。さらに軍守里寺址や王興寺址、弥勒寺址などの百済寺院には、飛鳥寺の三金堂と比較できる新たな要素が確認されることを示し、このような変化が中国の多院式寺院や高句麗寺院の影響によるものとみなし、これらの点から、飛鳥寺三金堂は高句麗の直接的な影響ではなく、百済で組織・派遣された臨時のプロジェクトチームによって総合的に企画・建立されたとものと指摘する。また、日本の初期寺院であり定林寺式伽藍配置と類似する四天王寺式伽藍配置については、既存の発掘調査の図面を再検討し、四天王寺式伽藍配置もまた百済寺院の伽藍配置と類似した形態であったことを推定し、あわせて新堂廃寺の事例にも論及する。次いで、飛鳥寺創建瓦製作のため百済から派遣された瓦博士の性格を検討し、その創建瓦が花組系列と星組系列に大別され、現時点での資料としては王興寺址出土瓦と最も類似する組合せが確認されていること、一方泗泚期の瓦当については、新たな寺院の創建時に必ず新しい創建瓦を製作することが知られているものの、王宮の場合、特定文様の瓦当が持続的に使用されたことを確認できることから、飛鳥寺に派遣された百済の瓦博士は、王宮や寺院の瓦を供給した技術系官僚であり、実務責任者として国家が組織したプロジェクトチームの一員であったと指摘する。それゆえ飛鳥寺の造営は全面的に百済の造寺工と瓦博士を始めとした各種技術者たちによると結論づける。

補論では、植民地期の百済故地における古蹟調査事業の展開過程を考究する。百済寺院に関する研究は植民地期に始まり、主要遺跡の多くがこの時期に発掘され、その後の研究に大きな影響を及ぼすことになり、当時の調査・研究結果は、現在もこの分野の研究における一次資料となっている現状を指摘する。次いで植民地期の百済故地における古蹟調査事業を4期に区分し、そのうちの第4期の扶余軍守里寺址をはじめとする廃寺址に対する調査が実施された背景については、この時期に慶州や平壤の古墳を中心とする古蹟調査事業が扶余の廃寺址に関する調査に転換した事実を指摘し、第4期の事業が飛鳥文化の源流の解明という日本学界の要求が深く関連していた点を批判的に検討する。

以上のように、本論文は、文献史料を基礎に、瓦当・塑像・寺院の伽藍配置など近年の考古学の成果に基づき、百済寺院の形成過程や、それが新羅や日本に及ぼした影響について検討することによって百済寺院史を体系的に提示しようとした論考である。百済が仏教を受容した4世紀後半から滅亡までの扶余・公州・益山の主要な寺院址の出土瓦や塑像の分析によって百済寺院の特性を解明し、その変化の要因や形成過程を広く東アジアの枠組から論究している点に大きな特色がある。

また、百済のみならず、新羅、日本の初期寺院との比較研究に活用しうる資料を抽出し、それに基づいて百済の対外関係における仏教の果たした具体的な役割や、新羅の興輪寺および飛鳥寺を始めとする日本の初期寺院の造営過程についても新たな解釈を提起している。現段階の考古資料に依拠しているために、今後の発掘調査によって修正の余地がありうることは否定できないが、現段階で活用しうる最新の資料を細大漏らさ

ず網羅、駆使している点は本論文の信頼性を高めている。

百済寺院史研究は、植民地期に遡り長期間におよぶが、文献史学、考古学、美術史、建築史、木簡学など多岐にわたる領域の研究史の十全な把握はもとより、確かな方法論、精緻な論証、独創的な構想など各々が相まって博士学位に相応しい論文として評価できる。

公開審査会開催日	2013年 1月 18日		
審査委員資格	所属機関名称・資格	博士学位名称	氏名
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	博士(文学)早稲田大学	李 成市
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	博士(文学)早稲田大学	新川 登亀男
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	博士(文学)早稲田大学	大橋 一章
審査委員	ソウル大学・教授	Ph.D(ソウル大学)	盧 泰敦
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	博士(文学)早稲田大学	川尻 秋生